

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

## ■第4章「東電の敗北」

福島第一原発事故は1号機に続

き、3号機でも素爆発の恐れが高

まっていた。再び起る爆発への恐

怖、上昇する放射線量。中央制御

室で、消防車による注水現場で、そ

して免震重要棟で必死の対応が続

く。だがあらかず人間をあざむか

のように2号機も危惧的狀況に陥

る。じわじわと広がる絶望感。電力

業界の雄、東京電力に「敗北」の瞬

間が迫っていた。

3月13日午前6時ごろ、消防車に

よる原子炉注水を担った東京電力自衛

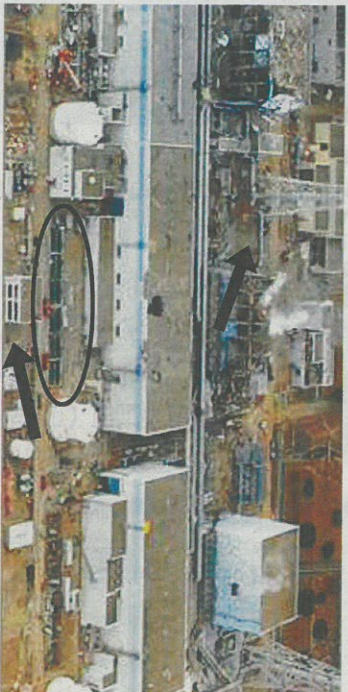
消防隊の副隊長新井知行(42)は、福

島第一原発免震重要棟で次の任務に

備えて待機していた。原燃近くの双

葉町の自宅で暮らす妻と、もうすぐ

## 振り回される現場



福島第一原発3号機前の逆洗弁ピット(丸印)と  
防火水槽(矢印) = 2011年3月(東京電力提供)

# 海水注水抑止に困惑

小学校に上かる長男のことか脳裏に

浮かんだ。

「5、6号機側にあった消防車が

使えるよです」。新井は隊員から

の連絡でわねに返った。

構内の高台にあって津波を免れた

消防車1台と陸上自衛隊の消防車2

台は既に1号機への注水に使って

た。さらに消防車があれば3号機に

も注水が可能となる。

と呼ばれる立て坑にたまった海水を

使うことにした。海水注入のライン

アツアツが整ったころ、所長の吉田昌

郎(56)が免震棟の対策本部で消防隊

メンバーに言った。

「どあえず真水でやってくれな

「防火水槽の水はあまりないです

ただ3号機ではこの早朝、原子

炉建屋から湯気のようなものが立ち

上っているのが目撃されていた。ホ

1人を敷いている間に建屋が爆発し

ないだろうか」。

「建屋脇を通る時は折るよつな気

持ちでした」

午前9時8分、3号機中央制御室

で復旧班が車のバッテリーを使っ

て、原子炉圧力を下げ逃げるに安全

「ここにこんなに海水があるのに」

実は吉田は、首相官邸に詰める原

25分には炉圧下がりの3号機への注

水が始まった。

だが、防火水槽の水はあつという

間に尽きてしまった。結局、午後1時

すぎになつて当初の予定通りの逆洗弁

ピットの海水を使うことになった。

「まったく何考えてんだ」。全面

マスク越しに隊員たちが言った。現

場は、遠く離れた場所にいる人間の

意図で振り回されていた。

(敬称略。年齢、肩書は当時。共

同通信 前田有貴子)